

大分県のシシ垣について

渋谷 忠章

(1) はじめに

シシ垣は、「猪垣」、「猪鹿垣」、「鹿垣」と書かれ、長崎県西彼杵郡のシシ垣については『大村郷村記』（享保七年）に「猪留石垣」と記され、昭和の初めまでは「猪留垣」と呼ばれていた。こうした呼び名は各地様々で、シシ土手、シシ囲い、シシ塚、垣、大垣、堀など構築材料や規模によって呼称が異なるが、鹿を「シシ」と呼ぶ地域もありここでは猪や鹿などの獣害から作物を防御する施設を『シシ垣』と呼び記すことにする。

人里の離れた水田で、その水田を取り巻くように巡らされた波トタンを見かけるが、最近では、電流を流す電線の柵状のものも多く見られる。その高さは1mに達しないものであるが、これらもイノシシからイネを守るために作られた一種のシシ垣である。こうした施設が設置される以前は、木や竹の柵あるいは石垣や土塁等で築かれたが、木や竹は残らず今は石垣・土塁・堀がその遺構として残されている。

(2) シシ垣の分布

大分県のシシ垣は、鶴見町・蒲江町・米水津村など県南地域が早くから注目されそれぞれの町誌や村誌にその存在や伝えなどが記されている。しかし、県教育委員会が調査した分布調査では佐伯市や弥生町にも存在し、また、県北では国見町と安岐

町に所在することが判明し、大分県では県南と県北に分かれて分布することが明らかである。このうち、県北の安岐町のシシ垣は、三ヶ所で確認されているが詳細な調査は行われていない。国見町のシシ垣については、『国見町史』によると、古来、榑来村の村民は榑来社(岩倉八幡社)を尊崇し、その眷属として鹿を大事にした。このため鹿肉を食べることはもちろん殺すことは禁じられていた。ところが、この鹿が田畑を荒らし村民が困惑していたために、時の庄屋小串要助が榑来村の村境にシシ垣を築いた。工事は山奥の方からはじめ、海岸部の端部に鹿の逃げ道をあげ、村内の男子四〇〇人が二手に分かれ山側から海岸へ鹿を追い、村外に追い出し逃げ道を塞ぎ工事を終了したという。以後、鹿の被害は無くなったと云う。今でも榑来社の氏は、鹿を捕ることも食べることもないそうであるが、シシ垣の築造に関する記録は明らかでない。現在このシシ垣は、海岸部を起点とし榑来浦を囲うよう東を岐部、西を伊美と境をなす丘陵の尾根上を走り、総延長約一二kmにわたって見られる。海岸部に近い地点では石垣と堀が比較的良好に残されているが、南側の山間部に向かうに従って1〜2段の石垣と土塁が部分的に残る程度となる。

一方、県南の鶴見町・蒲江町・米水津村のシシ垣は規模も大きくそれぞれの浦々を囲うもの、鱗状に山裾から尾根の稜線にかけて築造されたもの、山裾を帯状に走りいくつかの集落を防御するタイプのものがある。この地域のシシ垣の残りは比較的良好で、山側に堀を巡らせそれに沿って石垣を築いたものが多く見られるが、石垣だけを巡らせたものや石垣と部分的に土塁や切岸を組み合わせたものも存在する。しかしこうしたシシ垣は、本来の目的を失って以後、杉や桧等が植林され、いつしか破損したシシ垣の補修もされなくなっていくた。このため、シシ垣内に築かれた段々畑も荒れた状態になり猪の走った跡や鹿によって木の皮がめくられた姿を見るようになっていく。

(3) 県南のシシ垣

△蒲江町▽

大分県の最南端に位置する蒲江町は、典型的なリアス式海岸で複雑に入り組んだ入江と交互に岩礁地帯が続き、その背後は切り立った山々に囲まれている。シシ垣は、町内のほぼ全域に存在するが宮崎県と境をなす葛原浦と波当津浦では確認されず、今のところ県内では丸市尾浦を南限としている。このうち、蒲江浦の蒲江小学校裏側から高山海岸に面した高山地区にかけての標高約五〇m付近に築かれたシシ垣は、地元では大垣と呼ばれており蒲江浦から高山地区への猪や鹿の侵入を防いだものと思われる。また、このシシ垣は現状で高さ一・六mから二mを越すものもあり、山側には幅二〜三mほどの堀が巡る。石材は山で産出する片岩系の石を用いているが、高山地区に近いほど海石と呼ばれる海岸部にある円礫が使われている。さらに、県道延岡佐伯線の沿線にある浄水場から登ったところには木戸の跡が残っている。

高山地区では、大垣のさらに山側やそれに接していくつかの歪な楕円形をしたシシ垣が存在するが、これらは土地の所有者単位で築かれたシシ垣で大垣の以後に築かれたものである。このうち、我々が高山のシシ垣と呼んでいる旧延岡佐伯線にあり、標高約一〇〇mから一五〇mにかけて巡るシシ垣は、三時期にわたり拡張されたことが明確で、最終段階には数十段にわたる畑が機能したことになる。傾斜のきつい山の上部は、畑の幅が二〜三mになり高さ一mほどの石積みの段が



蒲江町 高山地区のシシ垣

つく。

一方、西野浦地区は標高約二〇〇mの尾根の稜線を走る町道仙崎高平線付近まで複雑に築かれ、裾部から頂部にかけて鱗状に見られる。その尾根から、海岸部に面して急激な傾斜でのびる多くの舌状丘陵を巧みに利用し、谷部と谷部に急傾斜のシン垣を築き丘陵部を囲うタイプや、丘陵の尾根と尾根に急傾斜のシン垣を築き丘陵斜面と谷部を囲うものなどがある。その規模も、一辺が約三〇〇mに及ぶものや五〇〇m以下のものもあり様々であり、「アテ」と呼ばれる落し穴も見られた。

ハ 鶴見町

町内のシン垣は、地元の郷土史家安部弥右衛門氏によつてシン垣の分布図が作成され、町がシン垣シンボジウムを開催するなど、早くから注目され観光施設の一つとして活用されてきた。

鶴見町は、西を佐伯市に接し東を豊後水道に向け突出した半島の町で、半島の稜線を境として南側が米水津村、北側が鶴見町にあたる。シン垣は、小規模のものも見られるが有明浦から梶寄浦にかけては、浦々を囲うように海岸から米水津村との境の稜線まで登り、その稜線と並行して横に走り、また海岸に下りるといったいわゆるコの字形をしたもので、複数の浦を囲ったものもある。丹賀浦は稜線までの標高が二〇〇mで、梶寄浦が約二三〇mを測り、その傾斜は極めて急激でありシン垣の築造及び畑地としての開発に費やした労力は計り知れないものがある。基本的には、石垣とそれに沿って堀が巡り石垣の高さは一・八〜二m程度であったと考えられるが、一部には石垣だけのものや土塁、切岸なども存在する。

また、鶴見半島の東端に位置する梶寄浦のシン垣は、米水津村側の椿原シン垣



鶴見町 中越地区の整備されたシン垣

が海岸からのびてこのシン垣に接続しており、最先端の鶴見崎はシン垣によって完全に出入り口を封鎖された形になっている。一方、鶴見町西側の佐伯市に接する吹浦地区は、海岸部から山側に向かって支谷がのびており、その支谷と海岸部の平地をを囲うように存在したものと考えられるが、全てを確認することは出来ない。さらに、吹浦と有明浦の間にあり鶴見町の中心地で町内では広い平地を持つ地松浦や沖松浦には、今のところシン垣の確認がない。

△米水津村▽

米水津村は、北を鶴見半島に南をキシメキ崎に挟まれ、大きく口を開けた米水津湾に面して小浦、竹野浦、浦代浦、色利浦、宮野浦等の集落が形成されている。シン垣は、これらのいずれの集落の背後に存在するが、全体的な分布調査は実施されていない。従って詳細は不明であるが、鶴見半島中程の南側にある間越地区は西側の小さな谷部に挟まれた丘陵先端を囲うものと、東側の谷部を囲うシン垣が連続しているが、東側のシン垣は畑側に石垣を高さ二・五mほど高く積み上げ、鹿や猪の侵入を防いでいる。また、木戸口が四ヶ所あり所有者の戸高皓爾氏によると、木戸口にはそれぞれに木の門があり、出入りの戸締まりは親から厳しくしつけられたという。

竹野浦地区は、花卉状に連続して集落とその背後の畑地を囲い、色利浦は支谷がかなり奥地まで伸びており、その支谷の上流までシン垣が見られその規模も竹野浦より大きい。いずれも集落とその背後にある畑地を囲んだシン垣である。

その他県南では、佐伯市、弥生町で確認されている。佐伯市のシン垣は、市の南西部にあたる青山地区で七ヶ所が確認されているが、小規模なものがほとんどである。このうち棚野地区にあるシン垣の一つは東西五〇m、南北四〇mで、高さ〇・五〜一・二mの石垣と幅約二mほどの堀が巡っている。また、この地は天領地でありシン垣が佐伯藩領だけでなかったことが判る。弥生町では、山間部にあたる本匠村や野津町と接する地域に七ヶ所が地元文化財調査員によって確認されているが、このうちの六ヶ所は楕円形をした畑を囲うもので、残りの一つは国道10号線沿いの田ノ平付近から本匠村の椎ヶ谷に向けて帯状に

のびたものである。

(4) まとめ

以上は、現在大分県教育委員会が平成十年度から実施しているシンシ垣調査によって明らかにされた一部であるが、調査の成果については近く報告書が刊行される予定である。大分県のシンシ垣については、大正年間に郷土史家河野清實氏が「豊後国東半島の鹿垣」¹⁾と題して国東半島のシンシ垣を多数紹介している。しかしその後は、シンシ垣そのものを調査研究することはなく、昭和四〇年代以降の町誌(史)や村誌(史)にその存在が報告されているにすぎないのである。こうしたなかで、鶴見町のシンシ垣については地元の郷土史家安部弥右衛門が『佐伯史談』に「猪垣の築造と灰床の開発」²⁾と「鶴見半島の猪垣について」³⁾と題した論説を載せ、町も平成三年「シンシ垣シンボウム」を開催し、一部が整備され観光施設として活用されている。

さて、今回、大分県教育委員会が調査を実施しているシンシ垣調査は、大分県内全域に所在するシンシ垣を対象にしたものであった。しかし、実際に現地に入ってみると、特に蒲江町、鶴見町、米水津村においてはいたる所に所在し海岸部から標高二〇〇m付近の尾根部にまで達するものも多くあり、その築造には想像を絶する当時の人々の労力を窺い知ることができる。もちろんそれは、平地のきわめて少ない海岸部に生きる人々が安定した生活を求めた耕地の開発史でもある。

その歴史のはじまりは、残念ながら大分県ではこれまで確かな記録を見ることが出来ないが、他県に残された資料等から大分県においても江戸時代後期にはシンシ垣が造られたものと推定される。国見町櫛来のシンシ垣は寛政一〇年(一七九八)から五年の歳月をかけ享和二年(一八〇二)に完成したという。県南では、『鶴見村誌』が安政二年(一八五五)と明治十四・十五年頃の築造を紹介し、安部弥右衛門氏は羽出浦役元文書の嘉永六年(一八五三)一〇月二日の灰床開墾の申請書「奉願口上書」から、少なくとも羽出浦地区の灰床周辺のシンシ垣は、嘉永六年以前の天保・弘化年間には完成していたものと推測している。また、地元の郷土史家黒木今雄氏は「シンシ垣の歴史」⁴⁾で梶寄地区のシンシ垣は万延二年(文久元年・一八六一)に着工し、文久二年に完

成したとされている。しかしこれらについては、その具体的なシシ垣についての史料は示されておらず今後の課題として残されている。

さて、そのシシ垣が役目を終えるのは高度成長期の昭和三〇年代である。道路の新設等による物資の流通が盛んになるにつれ、外部からの食料が持ち込まれるようになり、シシ垣に囲まれた畑地は檜や杉が植林され、またミカン園と化していった。今回の県教育委員会が実施した「シシ垣」調査は、民俗文化財「シシ垣」としての調査である。しかし「シシ垣」は当時の人々がより安定した食料を確保するために畑地の周辺に巡らされた防御柵であり、本来の目的は畑地の開発と作物の確保であった。平地の少ない海岸部の人々が急傾斜の山々を開墾し、より耕作面積の広い畑地を築きそれを維持した姿は、江戸時代後期から昭和三〇年代の限られた期間であるが、この地域の農業史そのものである。

今、ミカン園や植林されたかつての畑地は、さらに近年の歴史の流れによって鹿や猪の無法地帯と化し、シシ垣そのものは全く機能を果たしていないのが現状である。鶴見町でその一部が歴史的遺産として整備されていることは喜ばしいことであるが、シシ垣は民俗文化財としてだけでなく、当時の人々の生活を明らかにしてくれる記念物でもある。

参考文献

- 1 河野清實「豊後国東半島の鹿垣」『社会史研究』第九卷第三号（大正一二年）
- 2 安部弥右衛門「猪垣の築造と灰床の開発」『佐伯史談』第八三号（昭和四七年）
- 3 安部弥右衛門「鶴見半島の猪垣について」『佐伯史談』第九〇号（昭和四八年）
- 4 黒木今雄「シシ垣の歴史」『梶寄郷土史』（平成六年）